

『玄語』が長いあいだ理解されなかった、いや、長いあいだ研究者を混乱させ続けた理由のひとつは、前書きに述べた二種の読みの指示を本文の右と左に書き込んでいたことであり、語法が現代と異なるばかりか、江戸時代の他の思想家とも異なることによる。またさらに大きな要因として、ふたつの文を共通する語で束ねてひとつの文とするという『玄語』独自の記述法があげられる。私はこれを「束ね書き」と読んでいる。これを読むには、もとのふたつの文に分離する作業が必要となる。たとえば次のような例が頻出するのである。「條理整齊の読み」で示すと、

神本は、しんほんは、 則ち然るに幹運す、すなわしかかんとんす、
・ ・ ・ Aとする。

天神は、てんしんは、 則ち然るに爲成す、すなわしかいせいす、
・ ・ ・ Bとする。

これをそれぞれ一文だと思ったら間違いである。文Aは、

神は、しんは、 則ち然るに運す、すなわしかとんす、

本は、ほんは、 則ち然るに幹す、すなわしかかんす、

というふたつの文の共通要素である「則ち然るに」で束ねた文なのである。次のように表すと分かりやすい。

神は

運す

則ち然るに

神本は

則ち然るに幹運す

本は

幹す

文Bは、次のふたつの文を束ねたものである。

天は

則ち然るに成す

神は

則ち然るに爲す

同様に表すと、

天は

成す

則ち然るに

天神は

則ち然るに爲成す

神は

爲す

この文の処理は、「混成の読み」でも「竪立の読み」でも解決できない。文の解体（展開）が必要なのである。この記述法は、今日の情報処理技術で用いられるデータ圧縮の方法に近似している。

主語と述語の配置には一定のルールがある。文A・Bともに、最初の主語に対応する述語が末尾に置かれ、次の主語に対応する述語がその前に置かれている。つまり、主語と述語は、条理の語で定義された「内外」の位置関係に置かれているのである。こういうルールを解明しないと読めないのが『玄語』である。

あえて、批判を書くが、中央公論社の「三浦梅園」に書かれた山田氏の玄語論の曲解は、このような特異な記述法を読み取れなかったことに原因がある。

自然を探求するには先人の言葉でなく、直接に自然に向かわねばならぬ、と主張する梅園の哲学の立場を追いつめてゆくと、それは結局、条理の言葉、『玄語』の「文法」に帰着する。のみならず、わたしの考えでは、梅園の理論のなかでもっとも精彩を放っているもののひとつが、この言語や記号や表現に触れた部分なのだ。この逆説ほど、梅園の哲学とはなにかを雄弁に物語るものはないだろう。『玄語』が外延的に定義された概念群と厳密に二分法的な思考法とによって構成された、人工言語体系を駆使しているという意味で、梅園の哲学は分析哲学になぞらえることができるだろう。さらに類比をすすめれば、『贅語』は分析哲学者がおこなった形而上学批判にくらべられる。ただ、この土着の分析哲学者の用いた論理が、今日の分析哲学者のように形式論理でなく、群論的な思考法だったただけのことである。

また、別のところでは、次のように述べている。

これほど透明な世界の構造を、わたしたちはほかに求めることはできまい。だが、ふたたび裏返していえば、それは第四に、ある種の貧困さを意味する。梅園の構築した世界像は痩せている、とわたしは思う。たしかに、シンメトリーの静的な形式美には満ちみちているものの、対称性を破るところから生まれる、動的な、偶然的な、不安定な美がない。その世界は変化と多様性のもつ豊かさ欠けている。

同書 143頁

これらはみな、三浦黄鶴による出版用校訂版『玄語』を、本書で示した読み方と記述法を理解せずに書いたものである。よく見もせずに、抽象画を見て写実性がないと言い、写実画を見て抽象性に欠けると言っているような批評、批判に過ぎない。それが大佛次郎賞を受けたのであるが、こんなものは、私に言わせれば、よく観察せずに書いた感想文でしかない。研究者の姿勢として、歴史的偉業に対しては、一步を引く謙虚さが必要であるが、それすらもない。昨今の大学教授は、多忙に過ぎるのか、地道な資料調査をほとんど行わない。スポットライトを浴びるスターのようでありたいのか、あるいは、優れた業績を上げる営業マンのようでありたいのか分からないが、陽の当たらない地道な作業をやりたがらない。雌伏することが出来ないのである。雌伏が出来なければ雄飛もできない。結局、後世に恥を残すだけである。それがもてはやされる。戦後の日本とはそういう時代である。学問は後世のために為すものである。現世に利を求めんと欲すれば、後世に汚名を残さざるを得ない。

学問は一生の仕事です。

(末木剛博^{たけひろ}先生からのお手紙より)